

《 ついに会長の任期が最後の年に突入!! 》

～ 任期はアツという間だった。さて、今年の目標はどうしよう... ～

私が4代目の会長に就任し、アツという間に任期最後の年を迎えた。

昨年は当会発足10年という節目の年でありながらも、何ら記念的な事は一切出来ず、何か物足りなさを感じる1年であった。当会も10年が経ち、その間、会員の増減を繰り返しながら、結果的には会員が増えぬまま現在に至っている。10年経って大きく変わったのは「担ぎねぶたの規模が小さくなった」「制作環境も良くなり、制作も手馴れ、年々早く作れるようになった」ぐらいのようなものである。変わらないのは「担ぎねぶたを制作運行する時以外の行事に対して消極的な会員が多い事」だと思う。会員の皆さん、入会以来、何が違って何が変わっていないか振り返ってみて下さい。そして、何をどう変えるべきかを考えて下さい。

ここで過去2年間の目標を振り返りつつ、今年の目標を掲げたいと思う。

平成17年の目標

全体目標 『 人手不足解消と経費削減 』

・奉書紙の切れ端を無駄にせず、短い配線も結線して使うなど、物を有効利用する事で、ある程度の経費削減は出来た。何ら人手不足を解消する手立てを講じなかった。

各会員に対する目標 『 何事も面倒臭がらず積極的に物事へ取り組む心ある協力 』

・会員が積極的なのは、ねぶた制作運行期間である4月頃から8月下旬までのようである。それ以外の時期をどうするか問題である。

自分自身の目標 『 各会員への確な指示を出し、率先して会運営にあたる 』

・ある程度、会員へも指示を出して動いてもらったが、自分で動いた方が早いという事で自分自身が動きすぎた。

平成18年の目標

『 担ぎねぶたの制作だけでなく、その他の行事にも積極的に参加協力すること 』

・イベントや取材対応などへ協力してくれる会員は固定化しつつある。みんながもっと積極的になって欲しい。

『 出陣10年目にふさわしい運行をしよう 』

・10年目にふさわしい運行とは何なのか？それすら見出せないままで終わってしまった。目標を掲げた意味がなかったような気がする。

というように過去2年間の目標は消化不良のようなものばかりであった。

さて今年の目標は...

『 全てにおいて積極的に協力し、誰もが興味関心をもてる会にしよう! 』

消極的な会員が多いので、もっと積極的になって欲しい。外から見ると、仲間同士で楽しくやっているだけで、閉鎖的な会に見られているようなので、誰もが担ぎねぶたに興味関心をもてるような会づくり(「担ぎねぶたを作りたい」とか「楽しそうだなあ」と思えるような会づくり)を目指そう!
【記: 高谷俊幸】

《 松木明知: 著 「ねぶた」 - その起源と呼称 - 》

～ 私はまだ読みかけですが... 一見の価値あり! 皆さんも読んでみへ ～

昨年2月、ある新聞に津軽書房から「ねぶた」 その起源と呼称 というタイトルの本が出版されていると載っていた。著者は弘前大学医学部名誉教授の松木明知氏。その新聞によると「過去の文献を慎重に検討し、歴史を客観的にひもとくとする、氏の科学者のプライドが伝わってくる。」と書かれていた。近いうちに読んでみようと思いながら10ヶ月以上が経ち、つい先日、ようやく市民図書館から借りて読み始めた。私はまだ読みかけではあるが、とても興味深く読んでいる。どのような内容なのか一部抜粋簡略化し、紹介したいと思う。

この本は大きく3つの章に分かれている
「 . ねぶた灯籠、ねぶた祭の起源に関する研究の歩み 」
「 . ねぶた灯籠、ねぶた祭の起源について 」
「 . 「ねぶた」の呼称について 」

私は今、「ねぶた灯笼、ねぶた祭の起源に関する研究の歩み」の部分を読んでいる。この章は「1. 藩政時代」「2. 明治時代」「3. 大正時代」「4. 昭和時代前期」「5. 昭和時代後期」「6. 平成時代」「7. まとめ」の7つの節に分けられ、ねぶた灯笼やねぶたの起源について、これまで誰がどのような研究を行ってきたのかという事が書かれている。

1. 藩政時代

- 田村麻呂起源説を伝えている史料として『東日流(つがる)由来記』はあるが、田村麻呂起源説は虚構に満ちたもので、何ら信頼すべきものではない。
- 天明年間の比良野貞彦の『奥民図彙』、寛政年間の菅江真澄の紀行文や工藤白龍の『津軽俗説撰』にはねぶた灯笼やねぶた祭の記載は見られるが、起源については言及しておらず、先に示した3つの史料ではねぶた祭と七夕祭の関係を示唆し、田村麻呂起源説は全く記述されていない。
- 江戸時代にはねぶた祭の田村麻呂起源説は一部で唱えられていたと考えられるが、一般の人々に広く普及したとは思われない。

2. 明治時代

- 旧津軽藩士の内藤官八郎が明治に入ってから書いた『弘藩明治一統誌』や『弘藩明治一統誌月令雜報摘要抄』の中で田村麻呂起源説を展開した事で田村麻呂起源説が急速に広まった。また、ねぶたを当て字で「倭武多」の漢字を用いた事でねぶたをねぶたと誤って発音するようになった。
- 井上毅が東京人類学会報告に寄せた短文によると、津軽地方にはネブタ踊りという奇俗があり、屋台山車を押し出して「子ブタ、ナカレロ、マメノハ、トツパレ」と唱え歩き、血気の輩は喧嘩する。地元の人によれば、その起源は田村麻呂将軍に感謝するものであった。
- 佐藤弥六の『津軽のしるべ』によると、ねぶたの起源は田村麻呂説に加え、夷狄(1)を蝦夷地に流罪したことによる説を紹介しているが、その出典は示されず、佐藤自身の考えも述べられていない。

[1 夷狄(いてき)... 野蛮人のこと。]

3. 大正時代

- 民俗学者の柳田國男が『ネブタ流し』を発表。前述の佐藤弥六『津軽のしるべ』を引用し、田村麻呂起源説、更には東夷(2)の服従しない者を蝦夷地に流したことに始まる説を紹介しているが、柳田自身、満足し得る説ではないと述べている。また『奥民図彙』『真澄遊覧記』『風俗問状答書』などを引用し、ねぶたは厄災の害を払う「人形祭」であると考えていたようである。また、『真澄遊覧記』にある西津軽郡深浦の鹿島人形送りなどの例を示し、ねぶたは七夕とお盆との重複が推察されるとし、最後に「ネブタ」「ネムリ」という名称から、昔の人々は「ネブタ」を「睡魔」と考えていたらしいと述べている。この時点では、ねぶた祭の起源について何ら結論的な事は言及されておらず、この論文が下敷きとなって『眠流し考』が発表された。
- 風俗史研究者の加藤咄堂は『日本風俗志』を著し、津軽の風俗を論じた中でねぶた祭について棟方悌二からの報告を全文転載している。棟方は津軽に伝えられた種々の伝説を紹介し、「起源については確かなものがない。しかし、七夕祭とも、豊年祭とも言い、「ネブタ流れる」という言葉から考えると、悪疫払いか蟲送りが転じたものである。」と結論している。

[2 東夷(とうい)... 東方の野蛮人のこと。]

私が読み終えたのは全体の7分の1程度だが、多くの人々がねぶたについて研究し、どのように論じているのかがよくわかる。ここまで読んだだけでも著者の科学者たるプライドが伝わってくる。

この本を読破した後は、この本の中に記された他の文献も探して読んでみたいと思う。ねぶたの起源と呼称...この本はまだ奥深い。ただ漠然と担ぎねぶたを作っているだけでは駄目なような気がしてきた。 【記：高谷俊幸】

皆様に支えられ、おかげさまで11年目に突入しました。

今年も御支援・御協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます！

【青森担ぎねぶた実行委員会 会員一同】

発行：青森担ぎねぶた実行委員会事務局広報部
編集責任者：高谷俊幸
編集者：小笠原広昌・佐々木誠台・飯田寛子
事務局住所：〒030-0131 青森市問屋町1-18-40
TEL：090-9637-5117(事務局：小笠原)
Home-Page：http://homepage2.nifty.com/katugi
mail：ao.katsuginebuta.ss511022@mbp.nifty.com

編集後記：当会も11年目に突入した。10年(3650日)を振り返ってみると、会議だけでも約250回近く開催している。総制作日数は約900日、囃子講習会は約200回、会報は100号を超えた。過去10年間のうち、約4分の1の日は会員と一緒に居たことになる。何人かの会員との付き合いも10年を超えた。実に長い付き合いである。自分はただ年老いばかり...。これからは体力よりも気力で頑張るだけ！(高俊)